

# 小児科診療 UP-to-DATE

2016年12月28日放送

## 異才発掘プロジェクト ROCKET を通して見えたユニークな子どもたちへの教育的課題

東京大学 先端科学技術研究センター  
ROCKET プロジェクトリーダー 福本 理恵

2014年、東京大学先端科学技術研究センターと日本財団は学びの機会を失った志ある子どもたちを対象に「異才発掘プロジェクト ROCKET」という教育プロジェクトをスタートさせました。本日は、ROCKETのプロジェクトリーダーとして日々子どもたちに関わっている立場からROCKETをご紹介します。既存の教育的枠組みを超えた学びを求める子どもを取り巻く現状と、これからの教育のあり方についてお話ししたいと思います。

異才発掘プロジェクト、通称 ROCKET (Room Of Children with Kokorozashi and Extraordinary Talents) には志と突き抜けた能力のある子どもたちが集まる部屋あるいは空間という意味が込められています。実際、ROCKET

では自ら学びの場を求める意志のある不登校の子どもたちが集まってきています。今年度、文部科学省が実施した調査によると、日本で不登校になっている児童・生徒はあわせて12万人以上にも及んでいます。この実態調査を反映するように、ROCKETにも開始当初より予想をはるかに超える600名前後の子どもたちから毎年応募が寄せられています。これらの数値は、それだけの多くの子どもたちが学校での学びの機会を失い、自らの学びの意味を模索している状況にあることを示しています。不登校が増加する背景の一つには、集団や画一的な環境に馴染めない子どもたち

### 異才発掘プロジェクト ROCKET とは

Room  
Of  
Children with  
Kokorozashi and  
Extraordinary  
Talents

突出した能力はあるものの現状の教育環境に馴染まず、不登校傾向にある子ども（小学3年生～中学3年生）を選抜し、継続的な学習保障及び生活のサポートを提供するプログラム

#### 目的

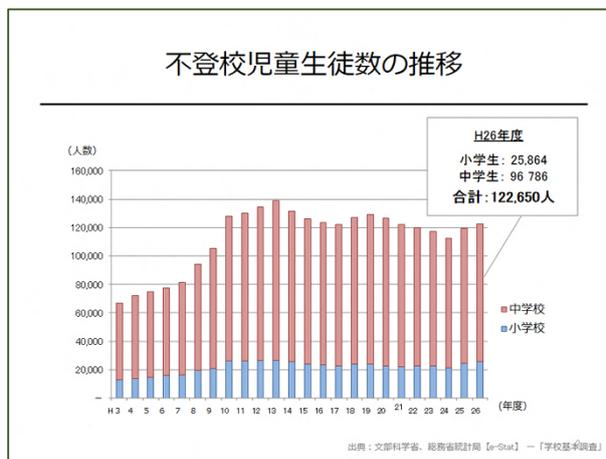
- 学習機会を失っている子どもたちへの継続的な学習機会の保障
- 突き抜けた子どもたちの凸の部分をもつ教育の提供
- ユニークな子どもたちを潰さない教育の実現
- 異才と呼ばれる人が生まれ、活躍しやすい社会の実現

#### ROCKETでの学びのスタイル



の居場所の少なさが起因しているように思います。枠からはみ出ている子どもたちは、その特異さゆえに社会に馴染めず、家では「育てにくい子」として不適応を起こし、学校では「扱いにくい子」として不登校の状態になっています。社会では人と違う発想や言動をする子どもたちを集団に馴染むように矯正していこうと働きかけますが、そのことは彼らを追い詰め本来持っていた自分らしさを彼らから奪うことになります。

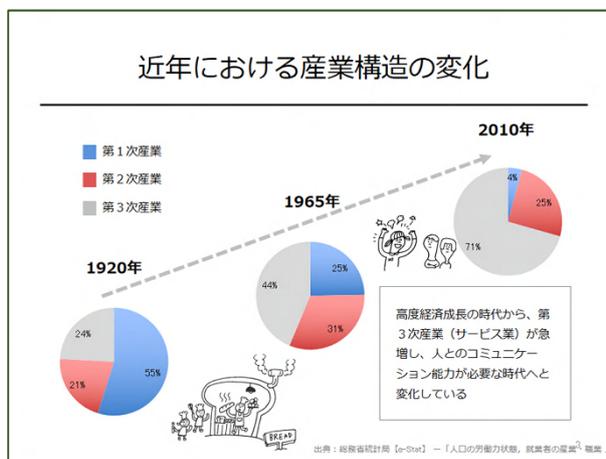
ROCKET では、このような子どもたちの人と違う発想こそがイノベーションの種になると考えています。彼らがそのままいられる場所を作ることが多様な学びや生き方が受け止められるような社会の土壌を作り出し、その結果としてイノベーションが起きるだろうと考え活動を行っています。



### 新たな障害を生むことを防止する

ROCKETは障害に関わらず、学びの機会を失った子どもを対象としたプロジェクトですが、コミュニケーションが苦手であったり、興味関心が偏っている子どもたちが集まっていることから発達障害児に向けたプログラムだと受け止められることがあります。発達障害という診断を受けている子どもの中にはいますが、私たちは発達障害の子どもを対象としてプログラムを実施しているわけではありません。近年では発達障害という言葉もよく耳にするようになり、コミュニケーションでのトラブルなど問題行動が見られるとすぐに障害名がつくようになってきています。しかし、ROCKETでは発達障害という考え自体、社会が求める能力観により変化するものであり、個人を規定するものではないと捉えています。つまり、発達障害とは社会で不適応を起こしている「状態」であって、時代背景や文化が違えば、いま発達障害と診断されている子どももそれを意識せずに過ごせたのではないかと思うのです。

事実、高度経済成長期までの日本では第一次、第二次産業の比率も高く、その時代の職人や生産者の人たちは現代よりも人とコミュニケーションをとらずに仕事をする事ができていました。ところが、産業構造の変化でサービス業が中心となったいま、コミュニケーション能力が過度に求められる社会へと変わってきたのです。こうした環境の変化を受け、社会性を身につけ、オールマイティに能力を発揮することが社会で生きていく上で必要なことだという共通認識が広がってきました。その結果、コミュニケーションが苦手な人や局所的にしか興味をもってないような人たちは「困った人



たち」という枠組みに入れられ、発達障害の診断を受けるケースが増加しているように感じます。社会の変化の流れから発達障害を捉え直すと、均質化が進んだ社会に適應する形へとこれらの子どもたちを矯正していくことが本当に必要なことなのか、一度立ち止まって考えなければいけない時期にきているように思います。

ROCKETで受ける相談の中には、変わったことをする子どもは治療すべきなのではないかと悩み、親御さんが子どもを病院へ連れていくケースも少なくありません。病院では「発達障害」という診断がおりると投薬が始まる場合もあり、薬の影響でさらに個性が失われたり二次障害に移行してしまい、どうやって元の状態に戻ればいいのか分からずに苦しむ方もおられます。こういった相談を受けるたびに、個性は社会に適應するように修正されるものではなく、多様な個性が潰されずに生かされるように社会の意識が変わるだけで救われる子どもたちは多く存在すると実感しています。ユニークな子どもたちの受け皿を持つ社会こそが、新しい障害を生むことの防止になるのではないのでしょうか。

### ROCKETの教育的特徴

ROCKETでは高い能力を有しながらも集団に適應できない子どもたちの受け皿となる場所を作り、その中で不登校の子どもたちだからこそできるプログラムを展開しています。特徴の一つは「時間制限がない」ということです。突然立ち上がった企画への参加や長期間のプログラムへの参加は、通常の教育の流れに乗る子どもたちに実施することは困難です。しかし、不登校になった子どもたちには持て余している時間があります。通常の公教育で区切られる既存の枠組みを取り払い、時間の制限をなくして興味の赴くままにやりたいことができる環境を作ることで、思い切った教育ができると考えています。人と同じペースで学習を求められると時間内にできないという劣等感に苛まれたり、過小評価されてできないというレッテルをはられてしまう子どもたちも、そうした自分のペースで進めることができれば競争で無駄に疲弊することなく力を発揮していくことができます。そのことが、結果的に彼らを潰さないことに繋がると考えています。

ROCKETのもう一つの特徴は、「教科書がない」ということです。教科書をお手本にして答えを求めていくやり方は人工知能が台頭してゆくこれからの時代には通用しなくなっていくと考えています。教科書に慣れている現代の子どもたちはすぐに正しい答えを導くことを目的



### ROCKETでのプログラム

■ Project Based Learning ミッションを遂行する中で生き方を学ぶプログラム

**プロジェクト 炭**

北海道の大地で炭焼き釜を再生し、最高の炭を作れ!

**プロジェクト 旅**

- 特急なし  
- 1日1,000円  
最果ての地にある現代の日本に失われたものを探せ!

■ Activity Based Learning 活動を通して、学ぶことの意味や教科を学ぶプログラム

例) 料理から学ぶこと

- ・ コスト計算
- ・ 買値と歴史
- ・ 食材のしくみ
- ・ 栄養学
- ・ 健康のしくみ など

■ Specific Interest Group 同じ興味を持つ仲間と集い、専門的な視点や技を学ぶプログラム

例) ロボット作りの発想法

ブロックを使ったロボット製作体験とロボットのアイデアのロボットトークに学ぶ

としてしまいがちですが、これからの時代を切り開いていくのは空気を読まずに独自の方法を見つけて突き進むたくましさや意志の強さではないでしょうか。教科書のないところに自らの答えを出す過程で起こるハプニングを受容しながら、自分流のやり方で彼らが力を発揮していける場としてROCKETは存在したいと思っています。

しかし一方で、子どもたちを受け止める居場所が安心を与える場であると同時に、刺激を与える場でもあるべきだと考えています。ROCKETでもその両輪のバランスをはかりながら子どもたちとかかわっています。子どもの興味が独りよがりの枠を超えて社会に通用するレベルに到達するためには、ときに挑発することも有効です。それは彼らが居場所に留まることに甘んじることなく、やりたいことを突き抜けさせていくときの原動力となり得るからです。揺さぶりをかけることは、彼らのユニークさが社会で認められるための生き方を示し、彼ら自身に問う機会になると考えています。ROCKETを始めて以来、「ROCKETに参加して子どもたちは変化しましたか」と尋ねられることが何度もありました。しかし、残念ながら子どもたちはそう簡単に変化しません。短期で変わる変化に期待することなく、彼らと長く付き合っていくことが大切だと思っています。そんな長期的な関わりを経て、20年、30年後の社会に、今の社会では困った人と言われる人たちが好きなことを仕事にして世の中で生き生きと活躍する姿が増えてきた時、ROCKETのチャレンジに対する一つの答えが見えるのではないかと考えています。全ての子どもたちを潰さず、学びの多様性が広がっていくことの先にイノベーションが広がる世界を想像しながら、今後もROCKETのチャレンジを続けていきたいと思っています。



「小児科診療 UP-to-DATE」

<http://medical.radionikkei.jp/uptodate/>